
Onlineゲーム

桐山

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Onlineゲーム

【ノート】

N0892E

【作者名】

桐山

【あらすじ】

譲り受けた旧型のゲーム機に届いていたメール。そこに紛れ込んでいたのは……

一通のメールを見つけた。

それは、弟のゲーム機を譲り受けた時のことだった。

弟の大貴は新しい次世代ゲーム機に夢中だ。長年使われてきた機体は静電気や内部のファンのせいで埃にまみれていて、くたびれたお父さんのようだった。

それまでこの機械を何度か借りたことはあった。大貴がサッカーの観戦にはまっていた時や、新作ソフトが発売されなかった時。もともとパズルやボードゲームが好きだった私は、隙をみてモノポリーなどに興じていた。時間のかかるロールプレイングゲームやアクションゲームの類はやったことがなかった。

「姉ちゃん、そういえばRPGとかやりたがってたよな」

そう言っつて、弟は数本のソフトも一緒に手渡してくれた。無名なタイトルのものばかりだ。

「それ中古でも売れないからやるよ」

高卒で溶接工として働き始めた大貴は、日に焼けた顔でにっこりと笑った。

「あと、それハードディスクが付いてて中に俺がやってたゲームが入ってるけど、いらぬなら消しちゃってもいいよ」

「インストールもできるんだ」

私は少し驚いて、受け取ったゲーム機を見た。もう5年以上も前の機種だ。パソコンが普及し始めた時期に売り出されたものだが、そんなに性能がいいとは思わなかった。

「うん。ほら、俺、こないだまでやってたゲームあるだろ？ あれなんかそうだよ」

そう言えば、と思い出す。綺麗な風景が再現された場所で、弟は弟の分身となるキャラクターを操作してモンスターと戦っていた。

「あのゲーム、最近、面倒くさくなっちゃってさ」

何が面倒くさいのかわからなかったけれど、私はそのゲームに興味を持った。何せ、大貴の部屋を通り過ぎる時にチラッと見たその画面の風景は、本当に綺麗だったのだ。

「私もそのゲームできる？」

意外に思ったのか、弟は目を丸くした。

「できるけど、オンラインゲームだからなあ……まあ、今月分まで課金してあるし、遊べないことはないよ」

「あと一週間か。ちよつとやってみただけだから、丁度いいと思う」

それじゃあ、と言って大貴は一旦私に手渡した機械をもう一度取り戻した。どうやら私の部屋にあるTVに接続してくれるつもりらしい。

「LANケーブル引くのがちよつとやつかいだよなあ」

独り言を言いながらも、大貴は慣れた手つきでゲーム機の接続を行ってくれた。

「これでよし」

TVにゲームの画面が映し出されるまで、そんなに時間はかからなかった。

「俺のキャラ使うのも変だし、倉庫キャラ一つ空けるか」

何やら私が遊べるように設定しなおしてくれているようだけど、今ひとつ何をやっているかわからない。

「姉ちゃん、名前、何にする？」

いきなり聞かれ、私は辺りを見回した。ゴミ箱の中にクッキーの空き箱が捨ててあるのを見つけ、その名前を言った。

「お、運いいな。それ、使えるよ」

同じ名前を別の人が使っていると登録できないのだ、と大貴は説明した。

キャラクターの作成画面に進み、髪の色や目の色や、どんな種族

にするのか、といったことを順番に決めてゆく。そういうことが一つ一つ新鮮で、私は知らないうちに気持ちが高ぶっていた。

「それじゃ後は操作方法だけだ」

大貴は基本的な操作の仕方やチャットの仕方を教えてくれた。画面上の私のキャラクターが、操作に不慣れな私のせいで不安げにうろろしている。

そんな様子を見て、弟は苦笑しながら付け加えた。

「最後に、これだけは気をつけるよ。個人情報漏らすなよ。ゲームに接続するのは同じ人間だからな。あと、余り他人に深く関わり過ぎると大変だからな」

「わかった。色々ありがとね」

お礼を言っていると、大貴は新しいゲームをするためにそそくさと自分の部屋へ戻っていった。

私にとってそれは始めてのRPGだったため、操作に慣れるために辺りを走り回った。コントローラーのスティックをぐるぐる回してみたり、街の中に立っている人に話しかけたり。

とは言っても、ゲームに接続している人に話しかける勇氣はまだなかった。弟の説明によると、キャラクターの頭の上に表示されている名前の色が白ければ接続している人(PC)、緑色ならばゲームに配置された人(NPC)、なのだそうだ。

街の中を走り回っていると、NPCから色々お遣いを頼まれた。

玉ねぎやソーセージを持って来いだなんて、ゲームなのに……と笑ってしまふ。

しばらく走り回った後、私は一旦ゲームを終了させた。もっと遊びたい、という気持ちもあったけれど、もう一時間ほど経っている。その日は電源を落とし、続きは明日にすることにした。

仕事が終わわり、家の手伝いを済ませると、私はゲーム機の電源を入れた。

けれど、ゲームのログインを行おうとした時、画面上部にある手

紙マークのアイコンに『25』と数字が書かれていることに気がついた。

興味を引かれてそのアイコンを選択してみる。すると、メーラーのような画面が広がった。

タイトルを読んでみると、その大半はモンスターを倒しに行くための誘いの内容だった。悪いかなど思ったけれど、弟はもうこのゲームをしないと断っていたことを思い出し、少し中身を読んでみることにした。

『白魔導士で次の日曜日、10時に空エリアに来て下さい』

『月×日に新エリアの攻略を行います。21時に庭に集合。遅れる場合は事前に連絡下さい』

時間指定のオンパレードだ。大責が面倒だと言っていた意味が少しわかった気がした。

そのメールはそれらの召集メールの中に埋もれるようにして送られてきていた。

『お久しぶり。元気にしているかな？』

もう木の葉が赤く色づいてきているね。

この間、みんなと一緒に遊びに行った時は本当に楽しかったよ。

最近入ってこないけど、仕事が忙しいのかな？

また会えるのを楽しみにしているよ』

それは大責のゲーム上の友達からのメールらしかった。日付は先週の初めだ。

他にもあるんじゃないか、と思って私は同じようなメールを探した。すると、同じ送り主からのメールがもう2件、見つかった。

『僕にはこの世界が全てだ。』

ここでみんなと出会えて本当によかった。

僕はこの世界の中ならみんなと一緒に遊ぶことができた。

手術が成功したらみんなと会ってみたいな。

去年リーダーがオフ会を提案した時、正直羨ましかった。

またあんな機会があったらいいな。

Taiki、リーダーに伝えてくれる？　なんてね』

最後の一通に、私の目は釘付けとなった。一昨日の日付だ。

『はじめまして。私はToshiyaの姉です。』

Toshiyaは昨日、長年の闘病の末に息を引き取りました。

皆様と楽しくこの世界で過ごせたことは、彼にとって幸せなことだったと思います。

Toshiyaと長い間親しくしていただき、本当にありがとうございました。』

私はゲームをするどころではなくなり、急いで弟を呼びに行った。大貴は淡々と綴られたメールの内容を読み、読みながら、涙を流した。

それは何年ぶりかにみる弟の涙だった。

私達は静かに画面を見つめ続けた。

私はその後、ゲーム機を弟に返した。

弟は、黙ってそれを受け取った。

(後書き)

実際にあつたことが元になっています。

ふと思ひ出し、どうしても書きたくまりました。

一期一会と言っけれど、本当にそうだと思います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0892e/>

Onlineゲーム

2009年3月24日09時04分発行